

1980年を迎えて

OR学会 会長 小林 宏 治

新年御目出度うございます。

OR学会も発足以来、今年でいよいよ23年目を迎えようとしております。この間、ORの理論、手法の開発研究はもとより行政関係、企業関係の具体的な問題の解決に日本のORが多くの成果をあげてきたことは、皆様のよく御存じのことです。

学会活動の中心である春秋2回の発表会も学校関係、官公関係、民間企業関係の各方面から多くの参加者を得て、研究発表、情報交換も年々活発になってきています。とくに、5年ほど前から行なわれているペーパー・フェア方式は、OR問題の特徴を生かした他の学会の研究会の発表会にはない方式であり、評判も良いと聞いています。学会の受託研究であった「都市公共政策システム分析に関する研究」、「環境影響総合解析システムの設計に関する調査研究」の両研究もすぐれた成果をあげることができたものと信じます。

また学会の日常研究活動も時流に即したテーマが設定され活発な研究活動が行なわれています。今年度は、わが国の現状から眺めて非常に重要な「都市計画と交通」「政策科学」「地域環境計画マネジメント」等が設定されています。このような学会活動の活発な展開は、学会関係者の絶大な御努力と学会員の皆様の御協力の御蔭であり、ここに学会長として厚く御礼申し上げます。

さて、今年はいよいよ80年代のスタートの年で

あります。振返ってみますと、70年代は経済面においてはドル・ショック、オイル・ショック、国際関係においては、中東地区のイラン情勢の急変と変化の激しい10年間でありました。いうならば“不確実性”と“ショック”の激動の10年間でありました。恐らく、これからの80年代においてもこの不安定性からの急速な回復は期待し得ないと思います。むしろ、不安定性を助長する要因、即ち、石油エネルギー問題、各国のインフレ問題、急速に進む老令化問題等の影響がますます強くなることが予想されます。

以上、述べましたように、1980年代は国際情勢、国内情勢の両面において、過去になかった新しいタイプの諸問題が発生し、従来の方法論、解決方策だけでは解決できない問題が多くなると思われます。

ORは、御承知のように基本的に問題解決の手法であります。従って、問題が新しくなればORの手法も新しい手法を見つけてゆくことが必要になります。事実、過去においてもOR的な接近法で解決された問題の中には、“英国におけるレーダーの配置計画問題”、“ベルリン空輸の問題”のように、今までになかった問題を、ORの先輩達は解いてきています。もちろん、最近の諸問題はその規模と複雑さの点において、過去の問題に比較して、解くことの困難な問題も多く、すべてがOR的な接近法によって解決し得るわけではありませ

んが、ORは本来、新しいタイプの問題を解決してゆく所にその特徴があると思います。80年代は、まさに、ORの真価が発揮される年代ともいえましょう。

最近、私共が関係しておりますコンピュータ・システムの分野では、集中化から分散化の傾向が強くなってきています。これは、過度の集中化により、ソフト・ウェアは巨大化し、開発費用、保守費用が急速に増大し、システムの機能追加、変更等が困難になってきたからであります。集中化による巨大化と複雑化の問題は、コンピュータ・システムの分野ばかりでなく、他の分野にも表われてきております。エジプトに造られたナイル河上流の巨大なアスワン・ハイ・ダムはエジプトに年間約80億kWhの電力を与え、農地を20%以上増加させましたが、川の清浄作用を失い、イワシ魚業を壊滅させ、河口の侵食を促進させる等多くの問題を発生させていると聞いています。わが国におきましても、東名日本坂トンネルの事故の背景に東名高速道路という巨大幹線に自動車交通が過度に集中し、在来の東海道の整備、即ち、分散化への考慮と努力に問題があったように思われます。また、工場生産設備の面におきましても、集中化による巨大化と複雑化は、必ずしも生産効率の向上にならない事態すら出てきています。

社会面におきましても、個人個人が異なった価値観をもつ価値観の多様化が進んできています。これは、社会生活の面においても分散化の傾向が進み、教育の分野においても今後多様化と分散化が必要になってくることになるのではないのでしょうか。従って、これからのORの問題の中には、集中化による合理性の追求から、分散化による合理性の追求に変わってくる問題が多く含まれてくると思われます。

このような分散化問題を解決してゆくためには、問題に関連する異なった立場の人が、その問題解決のために積極的に参加することが大切であり、1980年代は、OR的な問題解決の考え方や手法を身につけた人が、今まで以上に各分野において多く要求されるでしょう。

OR学会は発足当時会員数300名でありましたが、10年後の67年には1000名を越え、現在2000名以上の会員数に増加してきています。しかし、以上述べましたように、1980年代はORがますます重要な役割を果す時代になると思いますので、2000人位ではまだまだ少な過ぎるのではないかと、常々感じております。

量より質という言葉もありますが、すぐれた研究成果は多くの人々がその研究分野に参加することによって促進され、発展してゆくものであると思います。とくに、多くの優秀な若い人々が学会に参加し、すぐれた業績を理論面においても、また実績面においてもあげてゆくことが、学会発展のために重要なことであると思います。今年は、ぜひ現学会員の皆様の御協力を得て、会員の増加を計ってゆきたいものと念願しております。

また、わが国のORは学問の分野、理論面におきましては、決して世界水準に敗けない水準にあると確信していますが、実際面の適用になると、欧米諸国に対して必ずしも進んでいるとはいえないように思われます。

今年こそ、学問分野、理論面の専門家の方々には、今まで以上に実際面への適用に関心をもっていただき、一方、実務にたずさわっておられる方々には、各自の業務分野へORを積極的に展開していただき、合せて産学協力の成果をあげ、OR学会の飛躍的な発展の年になることを期待したいと思います。